

明王院・地主神社遺跡の発掘調査概要

(1) 遺跡の概要

明王院・地主神社遺跡は、平安時代創立と伝えられ、天台修験道の道場として知られる葛川息障明王院とその鎮守である地主神社を中心に広がる遺跡です。遺跡名でもある明王院の起源は、延暦寺で修業を重ねた相応和尚(そうおうかしょう)が、貞観元年(859年)に行場を求めて葛川に入峰し、明王谷奥部にある三の滝において生身の不動明王拝し、行場として草庵を築いたことに始まると伝えられています。以降延暦寺の庇護のもと発展し、室町時代には足利義満や義尚、日野富子が参籠し、その参籠札をみることができると、その名を広め、今も毎年7月に回峰行者による葛川参籠が執り行われています。明王院と同じく遺跡名でもある明王院の南側に位置する地主神社(重要文化財)は、明王院の鎮守として鎮座しています。

現在、明王院境内には江戸時代の本堂、護摩堂、庵室、倉と政所、庫裏などがあり、本堂は12世紀後半の千手観音・不動明王・毘沙門天(ともに重要文化財)の三体本尊で、大型懸仏(県指定文化財)も多く残されています。7月18日の深夜に行われる太鼓廻し(太鼓乗り)には多くの方々が参拝されます。

(2) 庵室の発掘調査

庵室は、建物を全解体した後、全面発掘調査を行ないました。調査の結果、16世紀前半頃まで機能していた前身基壇が出土しました。基壇の端には石積が施されていました。出土した前身基壇は現在の基壇石垣よりも2～3m程北側で出土し、今よりも内側にあったことが分かりました。さらに、前身基壇の主軸方位は、現在の基壇石垣より約10°東に傾いていたことも分かりました。前身基壇上からは11世紀後半～16世紀前半頃の土器類が出土しており、少なくともこの間は前身基壇上に建物が存在していたと考えられます。

前身基壇上で検出された遺構および整地層等は以下のとおりです。

① 庵室の調査で検出した遺構等

前身基壇最終整地層(図2・3参照)

前身基壇上で検出された整地層で、現在の基壇になる以前の最終段階の整地層です。層中からは出土した土器で最も新しい土器は16世紀前半頃であり、この時期以降に地面が整地されたことが分かりました。

前身基壇石垣(図2・3参照)

前身基壇端で検出された、自然石を用いて組まれた石垣です。約0.5mの高さを測ります。石垣は基壇の南辺(谷側)に見られ、裏込が施されていました。前身基壇最終整地層に伴って出土していることや、裏込が施されるという工法からみて、前身基壇最終整地層と同じ16世紀前半頃の時期が考えられます。

見切り石(図2参照)

前身基壇最終整地層の下層についてはトレンチ調査で確認したところ、見切り石と考えられる石列を確認しました。石列は4石出土し、天端はやや平らで、凹凸の少ない面を外側に向けて並べられていました。石の並びは前身基壇の主軸方位と平行しています。出土した見切り石は前身基壇最終整地層の下から出土しており、最終整地層よりも前の時期の遺構といえます。

前身基壇最終整地層中などからは16世紀前半頃の土器類のほかに、11世紀後半～15世紀頃の土器も出土しており、11世紀後半～最終整地が行われる16世紀前半までの間に存在した建物に伴う見切り石と考えられます。

礎石(図2参照)

現況建物北側の拡張トレンチと、現況建物入口の下から出土した礎石です。2石の礎石と1箇所の抜き取り跡を検出しました。2石の礎石と1箇所の抜き取り跡は、前身基壇の方位と平行する主軸方位で直線状に並んでいます。

② 庵室の調査で出土した遺物

前身基壇最終整地層中から、11世紀後半から16世紀前半頃(平安時代末頃から安土桃山時代)の土師器などが出土しました。このことは前身基壇が機能していた時期を示しています。

(3) 本堂の確認調査

本堂については、解体修理時に前身建物の部材が確認されていました。よって基壇についても前身となる基壇の有無およびその規模の確認調査を行いました。調査は現況基壇の内側に8箇所の調査坑を設定して行いました。調査の結果、やや崩落気味な部分はありませんでしたが、各調査坑から現況よりも内側で前身基壇の痕跡を確認しました。

各調査坑の状況は以下のとおりです。

① 本堂の各確認調査坑の状況(図5参照)

T-1

本堂建物南半部の中央付近に設定した調査坑です。厚さ5cm程度の現況整地層の下層から硬化した暗灰色の前身整地層を確認しました。前身整地層は現況基壇端から約2.5m内側のあたりで南方へ緩やかに下降していました。下降を始める辺りから崩落していました。

T-2

T-1の西側、本堂建物南半部の西寄りに設定した調査坑です。厚さ5cm程度の現況整地層の下層から硬化した前身基壇の層を確認しました。前身基壇の層は現況基壇端から約2.1m内側でなくなり、その外側は現況基壇の拡張に伴う造成土でした。前身基壇と現況基壇造成土の間からは拳大から人頭大の石が出土しました。

T-3

本堂建物北半の西寄りに設定した調査坑です。厚さ1cm程度の現況整地層の下層から暗灰色の前身基壇の層を確認しました。前身基壇の層は現況基壇端から約1.7m内側でなくなり、その外側は現況基壇の拡張に伴う造成土でした。前身基壇と現況基壇造成土の間からは、直線状に並ぶ石列が出土しました。この石列は基壇の端を示す見切り石と考えられます。

T-4

本堂建物北半の東寄りに設定した調査坑です。厚さ1cm程度の現況整地層の下層から前身基壇の層を確認しました。前身基壇の層は現況基壇端から約1.7m内側でなくなり、その外側は現況基壇の拡張に伴う造成土でした。前身基壇と現況基壇造成土の間からは、T-3のような直線状に並ぶ石列は出土しませんでした。

T-5

本堂基壇西半の中央付近に設定した調査坑です。厚さ2cm程度の現況整地層の下層から前身基壇の層を確認しました。前身基壇の層は現況基壇端から約1.4m内側でなくなり、その外側は現況基壇の拡張に伴う造成土でした。

T-6

本堂基壇東半の中央付近に設定した調査坑です。厚さ3cm程度の現況整地層の下層から前身基壇の層を確認しました。前身基壇の層は現況基壇端から約0.5m内側でなくな

り、その外側は現況基壇の拡張に伴う造成土でした。

T-7

本堂基壇南半の東寄りに設定した調査坑です。厚さ5cm程度の現況整地層の下層から前身基壇の層を確認しました。前身基壇の層は、T-1で確認した状況と似ており、やや崩落していましたが、現況基壇端から約2.5m内側でなくなりました。その外側は現況基壇の拡張に伴う造成土でした。

T-8

本堂基壇南半の東寄り、T-7の北側に設定した調査坑です。厚さ5cm程度の現況整地層の下層から前身基壇の層を確認しました。

② 本堂前身建物の遺構について

各調査坑からは前身基壇の端は分りましたが、前身建物の礎石や礎石の抜取跡などは明らかにはなりません。現況で使われていない礎石は表面上に見られますが、解体修理時の調査で確認された柱の直径から考えると、いずれも柱が乗切らない大きさのものです。

③ 本堂前身基壇の規模について

各調査坑で確認された前身基壇端から、前身基壇の範囲を復元すると図5・6のようになります。前身基壇の高さについては、現況基壇に拡張するとき1～5cm高く盛っている程度でした。前身基壇と現況基壇の規模を対比すると以下のようになります。

	前身基壇	現況基壇	拡張規模
南北方向	14.0m	17.8m	+3.8m
東西方向	11.0m	12.9m	+1.9m
面積	154.0m ²	229.62m ²	+75.62m ²

④ 本堂の確認調査で出土した遺物

本堂の出土遺物は主に現況基壇造成土から出土しました。出土遺物は土器類で、11世紀後半～13世紀頃の土師器などで、本堂は少なくとも11世紀後半頃(平安時代末頃)から存在したことを示しています。

(4) まとめ

今回の発掘調査で確認できた調査成果について整理すると、以下の点になります。

【庵室の調査】

・11世紀後半～16世紀前半頃の間、現況とは方位が異なる前身基壇が存在しました。

出土遺物からみた年代は、前身基壇上で確認されたもっとも古い遺構は11世紀後半の礎石と見切り石です。最終段階は低い石垣が造られた頃で、石垣に伴う最終整地層から出土した土器の年代からみて16世紀前半頃と考えられます。現況の基壇と石垣はこの時期以降に造られ現在に至っています(図4)。

前身庵室は、文保元年(1317年)に描かれた『葛川相論絵図』(重要文化財)の中に、明王谷川が現在よりも激しく蛇行しており、庵室も護摩堂よりやや内側に位置するように描かれています(図7)。このことは今回検出した庵室前身基壇が現況基壇よりも内側(北側)で出土したこととほぼ合致しています。

庵室部分は全面発掘を行いました。さらに、周辺数箇所にも地下遺構の状況を確認する小規模な調査坑を設けて調査を行い、造成土は確認できるものの、石垣等の遺構は出土しませんでした。前身庵室が現在よりも内側に存在したことは、

明王谷川の影響による地形の制約による可能性が考えられます。

現況庵室の前回の建替えは、庵室にあった棟札から慶長10年(1605年)であることが分かっています。このことから現在の基壇は慶長の建替えに伴って、石垣が築かれ造成面の拡張によって庵室の位置も外側(南側)へ移されたようです。

【本堂の調査】

- ・本堂は、現況よりも規模が小さい前身基壇が存在した。

出土遺物からみて11世紀後半頃には本堂前身基壇が存在したことが分りました。本堂の建物規模は、解体修理の調査で確認された前身部材やその他資料などから、現況建物よりも小さかったことが分かっていました。今回検出された前身基壇の規模が現況よりも小さいのと符合します。

今回の調査は、建造物と埋蔵文化財の調査を協同して行いました。今回の総合的調査により、建物調査が示す年代、古文書や古絵図等が示す内容に加え、地下遺構や出土遺物が示す年代がよく合致し、現存する寺院の変遷を時期的に追えることができる、重要な資料を得ることができました。

明王院は「葛川息障明王院」といい、寺名は建武元年(1334年)に勅号を賜り、その数年前の『葛川相論絵図』には山岳伽藍をもった寺院の様子をうかがうことができます。しかし、それ以前の名称は明らかではありませんが、葛川参籠の記録※1を平安時代末に見ることができます。

今回の調査では、同位置から平安時代の同時期の堂宇跡を確認することができました。平安時代以降多くの寺院が荒廃し始め、中世に入って往時の姿を取り戻すことなく終焉を迎えますが、今回の調査では平安時代末頃にまで遡り、現在に至るまで連綿と途切れることなく山岳修験の回峰道の道場として受け継がれていたことを明確にするものです。その地が貞観元年に相応が草庵を建立した場所であるかは今後の課題ではありますが、今回の調査で得られた内容は、修験道の山岳寺院の変遷や葛川ならびに滋賀県の歴史を考えていく上で、非常に意義深い資料といえます。

平安時代の葛川参籠古記録

- ※1 ・治承5年(1181年) 藤原兼実日記『玉葉』
「今日より法眼、葛川に参籠せられ云々」
- ・平安時代末 後白河法皇『梁塵秘抄』
「いづれか葛川へ参る道、仙洞・七曲がり・崩れ坂」

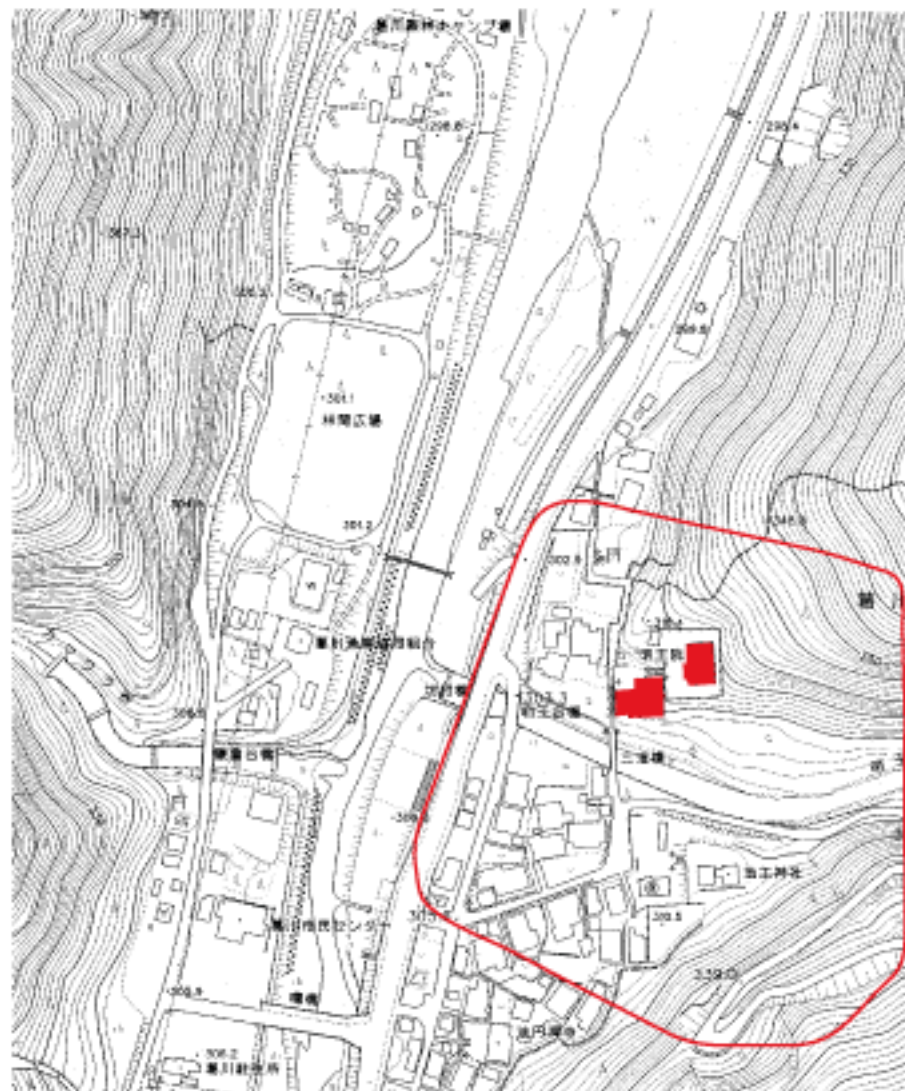


図1 調査地位置図

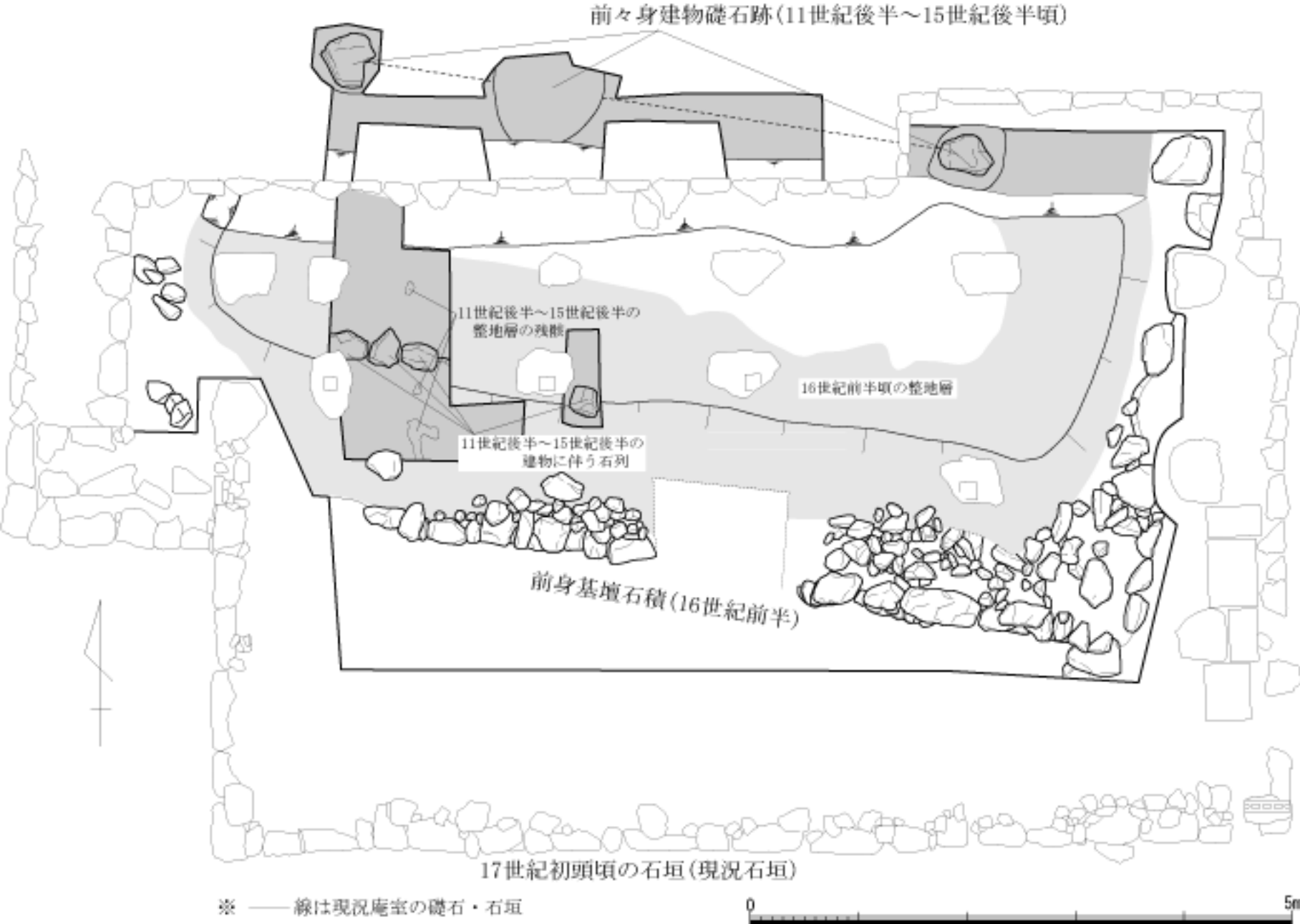
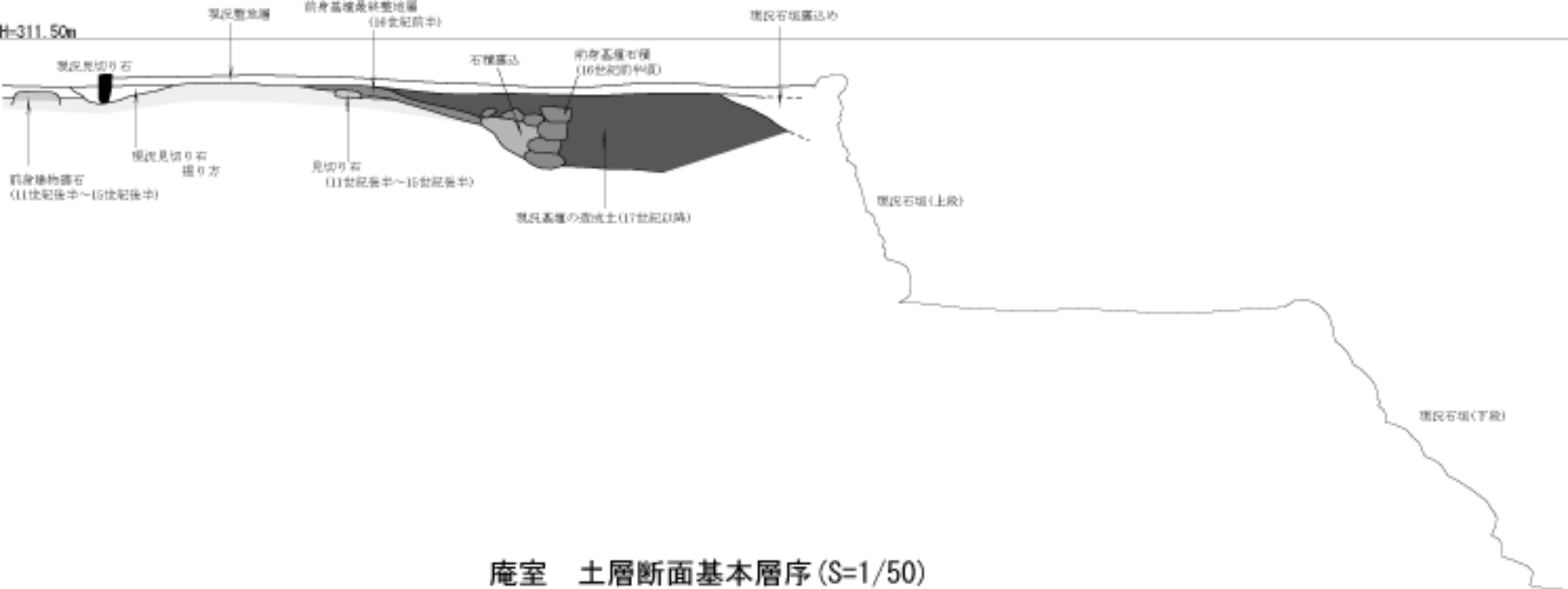


図2 葛川明王院 庵室 前身遺構平面図



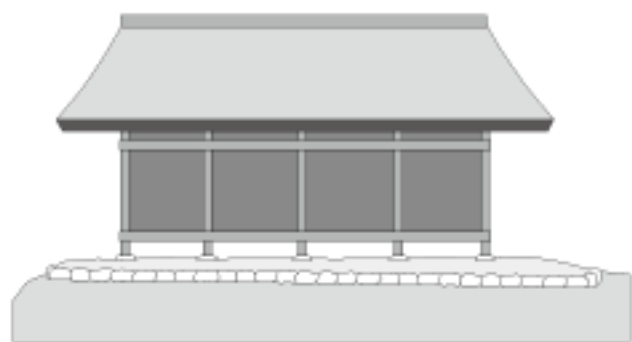
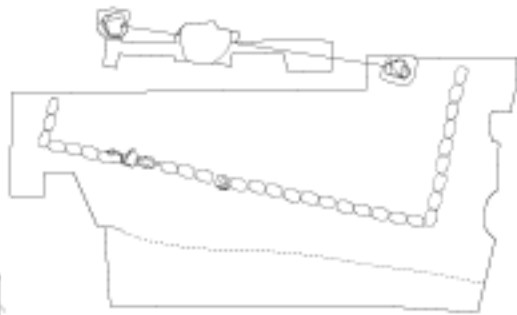
H=311.50m



図3 葛川明王院 庵室基壇基本土層断面図・前身基壇石垣立面図

平面図

想像図



11世紀後半～15世紀後半頃の基壇

平面図

想像図



16世紀前半～16世紀後半頃の基壇

平面図

想像図



17世紀初頭～現在の基壇

図4 葛川明王院 庵室基壇変遷図

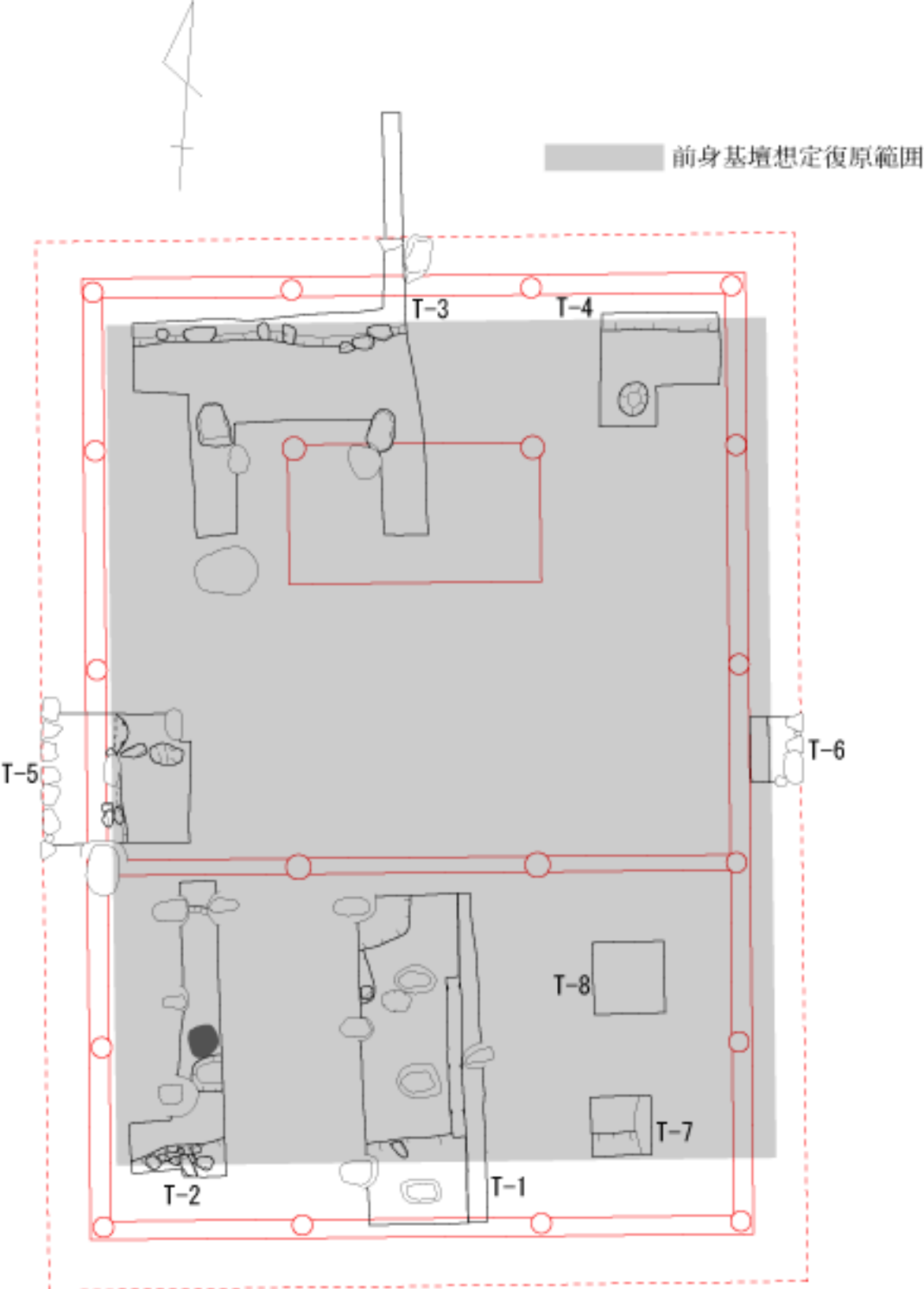


圖5 葛川明王院 本堂 確認調査坑配置図

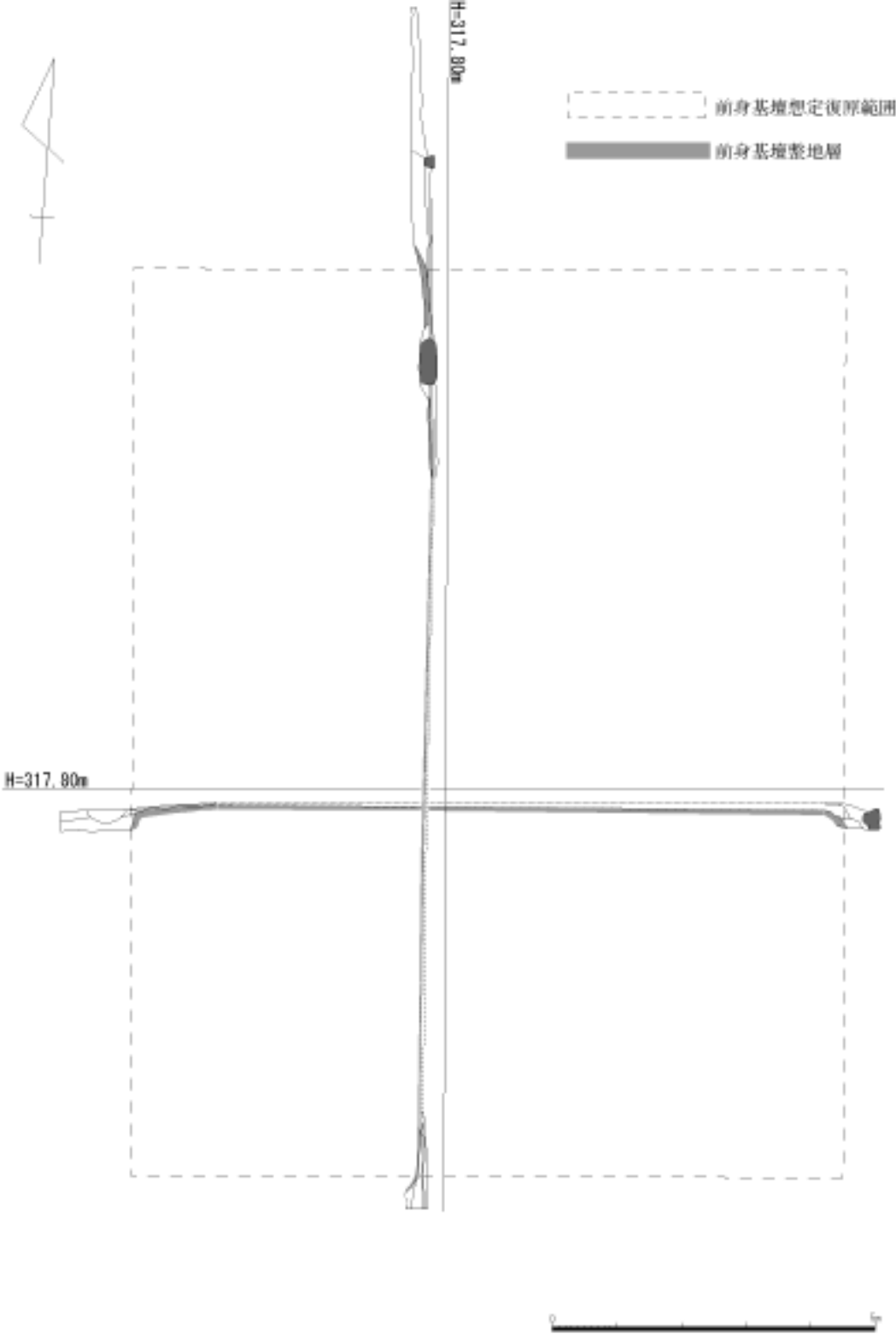
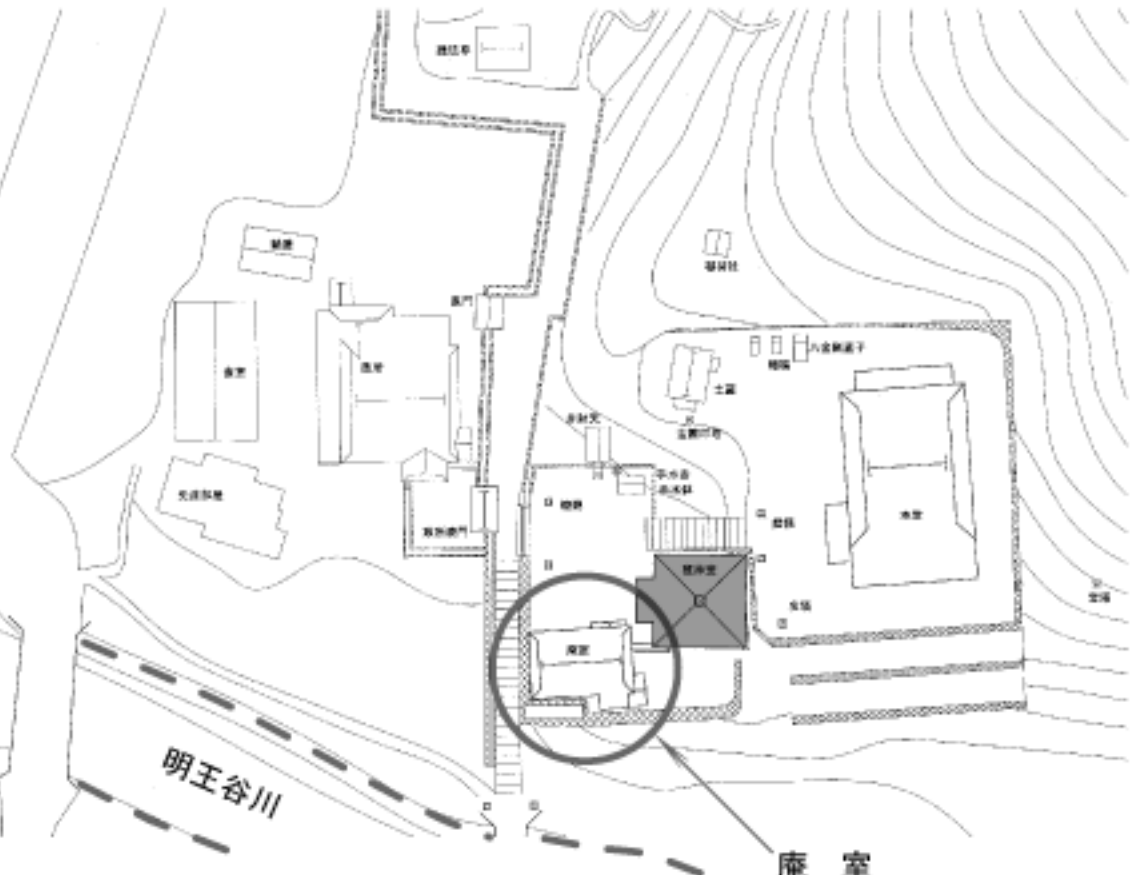
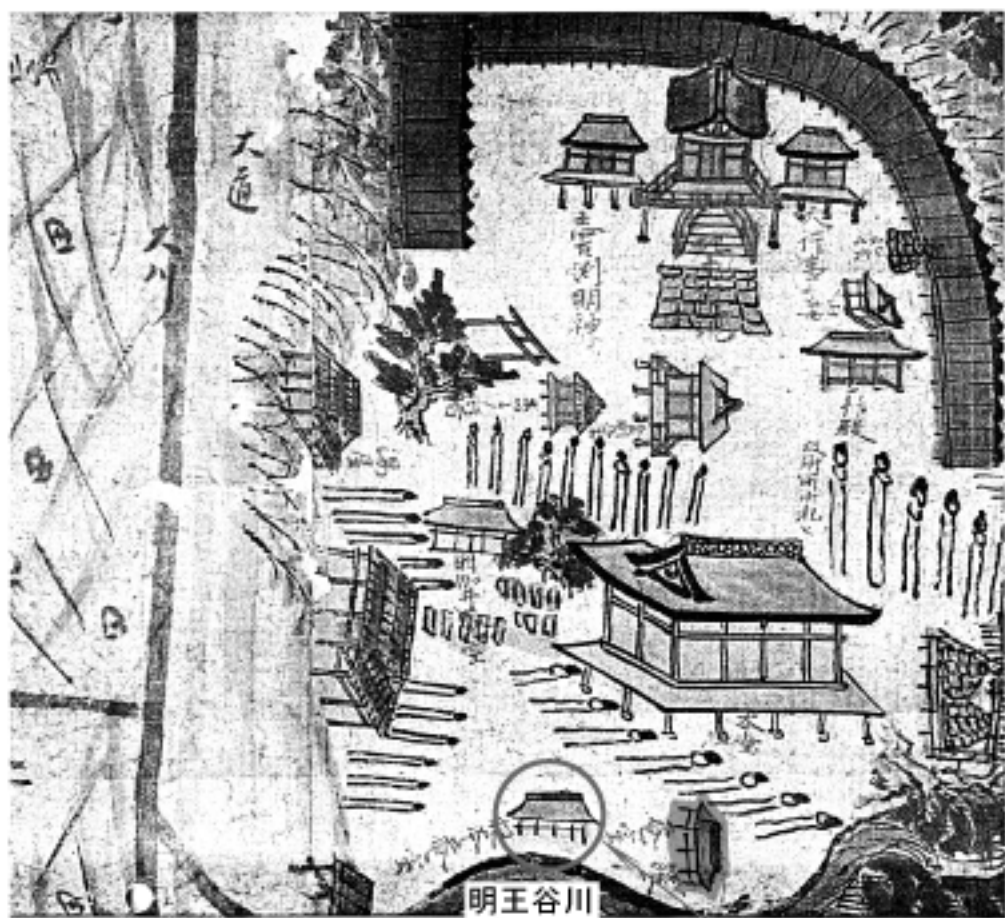


図6 葛川明王院 本堂 前々身基壇基本土層断面図



↑ 現況の明王院境内



← 『葛川相論絵図』にみえる14世紀の明王院境内

庵室

図7 葛川明王院 現況境内建物配置図と『葛川相論絵図』の境内建物配置図

『新修 大津市史2』より



庵室 前身基壇(東から)



庵室 前身基壇石垣(南西から)



本堂 前身基壇 南辺部



本堂 前身基壇 北辺と石列